

Title	テレビのリアルタイム視聴の性質：日本の1970年代の子どものテレビ視聴の考察
Sub Title	Nature of television viewing in real time : considering the attitude of television viewing of Japanese children in the 1970s
Author	佐藤, 幸子(Satō, Sachiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.91 (2021. ) ,p.(1)- 15
JaLC DOI	
Abstract	The paper examines the nature of watching television in real time by observing the attitude of Japanese children in the 1970s (television natives) in terms of watching television. Whether watching television programs in real time or at another time after broadcasting (time-shifted viewing), watching television may affect people's time management to a certain degree because it is deeply involved in people's lives. Given this perspective, the paper discusses the involvement of watching television with viewers. The 1970s is the decade of real-time viewing, as after the mid-80s, video cassette recorders became popular in Japan, which gave way to time-shifted viewing. Examining how television natives had viewed television in this decade may reveal the nature of real-time viewing. Several former social surveys indicate that television natives have strongly kept television memories of this era and shared such memories among them. The paper clarifies where such strong memories come from. These may come from watching television, as viewers feel that they are sharing the same timeline while watching television, which results in sharing memories related to television among them. Moreover, in the 1970s, most people watched television in a particular place, such as the dining or living room at home. As such, television natives shared a common time and place when watching television, which creates a sense of community, even if it is in front of the television. Such a sense of community may have strengthened these children's memories regarding watching television. Television programs were originally viewed in real time, and watching television can be said to have a nature that brings such a sense of community.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## テレビのリアルタイム視聴の性質

—日本の1970年代の子どものテレビ視聴の考察

### Nature of Television Viewing in Real Time: Considering the Attitude of Television Viewing of Japanese Children in the 1970s

佐藤 幸子\*

*Sachiko Sato*

The paper examines the nature of watching television in real time by observing the attitude of Japanese children in the 1970s (television natives) in terms of watching television. Whether watching television programs in real time or at another time after broadcasting (time-shifted viewing), watching television may affect people's time management to a certain degree because it is deeply involved in people's lives. Given this perspective, the paper discusses the involvement of watching television with viewers. The 1970s is the decade of real-time viewing, as after the mid-80s, video cassette recorders became popular in Japan, which gave way to time-shifted viewing. Examining how television natives had viewed television in this decade may reveal the nature of real-time viewing. Several former social surveys indicate that television natives have strongly kept television memories of this era and shared such memories among them. The paper clarifies where such strong memories come from. These may come from watching television, as viewers feel that they are sharing the same timeline while watching television, which results in sharing memories related to television among them. Moreover, in the 1970s, most people watched television in a particular place, such as the dining or living room at home. As such, television natives shared a common time and place when watching television, which creates a sense of community, even if it is in front of the television. Such a sense of community may have strengthened these children's memories regarding watching television. Television programs were originally viewed in real time, and watching television can be said to have a nature that brings such a sense of community.

Key words : Television, 1970s, real-time viewing, time-shifted viewing, memory  
キーワード : テレビ, 1970年代, リアルタイム視聴, タイムシフト視聴, 記憶

---

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科

## 1. はじめに

### 1.1. 論文の目的

本論文は日本の1970年代のテレビ視聴を手がかりに、テレビのリアルタイム視聴の性質を考察するものである。リアルタイム視聴は放送メディア本来の視聴の形式であり、放送されている時間に視聴する。それに対し、タイムシフト視聴は家庭用ビデオデッキの普及に伴い生まれた視聴形式で、録画した番組をあとで視聴するものである。ビデオ録画のみならず、視聴者の都合のよい時間にインターネット回線を介してのストリーミングでの動画視聴も普及している現在では、タイムシフト視聴に対する特別感や違和感もなく、テレビ視聴と動画サイトの視聴との間に差を感じなくなりつつある。そうしたメディア状況のなか、リアルタイム視聴とタイムシフト視聴の違いがあることを明らかにしたいというのが本論文のテーマである。放送メディアが生活に深くかかわり、視聴する側の人びとの時間管理にも影響を及ぼすのであれば、テレビを視聴する時間帯を都合よく変更することの可否によって大きな違いが生まれうる。本論文は、そうした問題意識を持ちながらリアルタイム視聴の特質を考えていくものである。

リアルタイム視聴を考察するにあたって手がかりとするのは、1970年代の子どものテレビ視聴である。1970年代はテレビが全国ネット化され、カラーテレビも普及し、現在につながる形でのテレビ放送が確立した時期と見てよい。そして1980年代半ば以降はビデオデッキの普及によりタイムシフト視聴が広がることを考えれば、1970年代こそいま現在の状況と比較しうる、テレビのリアルタイム視聴の時代といえることができる。その時期の子どもたちはいわば「テレビ・ネイティブ」であり、テレビ・ネイティブである当時の子どものテレビ視聴を検討することによって、リアルタイム視聴の性質を明らかにすることができると思われる。

なお、本論文での「子ども」とはおおむね小学生を指している。1970年代の小学生であるので、早生まれを考慮しなければ1958年から1972年生まれが該当し、生年でいえば主に1960年代生まれといえることができる。

### 1.2. 考察の枠組み

コンテンツである番組はリアルタイム視聴でもタイムシフト視聴でも同じくカラーの音声付き映像であって違いがないのだから、リアルタイム視聴をタイムシフト視聴との違いという観点で検討することは、テレビをその視聴形式に着目して見つめなおす作業となる。この視聴形式とはテレビ視聴が包含する構造・構成であり、本論文では「フォーマット」と呼ぶこともあるが、これはいわゆる「番組フォーマット」<sup>1)</sup>を意味するものではない。

メディアの視聴形式に着目することじたいは、マクルーハンの「メディアはメッセージである」と同じ関心だといえる。マクルーハンは、メッセージにはメディアとコンテンツという2つの位相があることを示したうえで、メディアの形式に着目するという立場を表明した(門林2009: 37-42)。さらにメディアは常に別のメディアを内包する入れ子構造であり、メディアのコンテンツに目を向ける態度は他のメディアに目を向けていることにすぎないことも指摘している(McLuhan 1964=1987: 8)。そうであれば、何を見たのかではなくどのように見たのかによってもたらされる性質もまたメディアの性質のひとつということになる。

形式を重視する場合、アーキテクチャ論というアプローチも考えることができた。アーキテクチャとは、環境の設計によって人びとに一定の幅での自己決定を促すしくみであり、設計によって技術的、物理的に行為の可能性を封じ、ルールや規則を内面化させることなく人々をコントロールするものである(鈴木 2009: 112, 濱野 2008: 20)。テレビ視聴は技術的あるいは物理的制約を伴うため、こうしたアーキテクチャの要素があることは十分考えられる。一方で、テレビはその形式のなかに不可分にコンテンツが存在するため、コンテンツをまったく無視して論じることは難しい。そのため、アーキテクチャ論でテレビ視聴を分析することには限界があると考えられる。

1983年の時点で、テレビが1970年代を通じ「日常化」「慣習化」し、テレビ・メディアになったと指摘されている(北村・中野編 1983)。この時点では、テレビはまだリアルタイムのメディアであり、リアルタイム視聴の視点から、テレビの視聴による「日常化」「慣習化」が検討されたのである。いまリアルタイム視聴をタイムシフト視聴の対照として考察するならば、タイムシフト視聴が普及した現在の視点が必要となる。そうした視点のひとつとして、日本では2002年に確立し一般に広がったパブリックビューイングを取り上げたい。

本論文では2章で日本のテレビを概観し、3章ではいくつかの社会調査に基づいて1970年代のテレビの状況や子どもの生活時間、そして当時の子どもとテレビの関係性について記述する。4章では、それらを踏まえて1970年代のテレビ視聴の性質について考察する。

## 2. 日本のテレビ

### 2.1. テレビというメディア

メディアのなかでも新聞、雑誌、ラジオなどは、第一次大戦後広告媒体として意識され「マス・メディア」として人びとに認識された(佐藤 1998)が、テレビもそうしたマス・メディアのひとつであり、ラジオと同様に放送メディアである。

先に登場したラジオは音声のみを伝える放送メディアで、日本では1925年に放送が開始され、第二次世界大戦を経て1950年代半ばに最盛期を迎えた。NHKラジオの受信契約数は1958年がピークである。一方、映像が伴うテレビは1953年に放送が開始され、その後急速に普及して1961年を境にNHKテレビの受信契約数がラジオを上回る。東京オリンピックが開催された1964年の年度末には受信契約数が1,700万件に達し、この頃には大半の人が自宅でテレビを見られるようになっていた(NHK放送文化研究所編 2003: 113-117)。テレビは登場から10年後にはほぼ全国に、異例の速さで普及している。

テレビ放送は白黒で始まったが、1960年9月からカラー放送が始まり、1971年にNHK総合が全時間帯のカラー化を達成した。この年、カラーテレビでの受信契約数(1,179万件)が白黒テレビの受信契約数(1,172万件)を上回り、テレビはカラーの時代に突入する(NHK放送文化研究所編 2003: 119)。カラー放送もまた異例の普及速度であった。

さて、放送メディアでは、放送局が番組表を編成し、番組を制作、送信する。受信機は各家庭に置かれ、人びとは受信機のそばで番組を視聴する。放送メディアの最大の特徴は同時に広範囲に情報を配信することができること、そして情報が直接家庭に入ってくることにある。それが機能するには、放送局と視聴者が時刻で同期していることと、いつどのような番組が送信されるという情報(番組表)を視聴者と共有していることが必要である。こうした番組表の共有は新聞などの他のメディアを介して実現されてきた。つまり、放送メディアが成立、発展しうるのは、絶対的な時刻が共有されていて、かつ放送

以外の手段により情報が広く流通しうる社会なのである。

テレビは多くの技術やシステムによって成立するがゆえに技術によって制約を受ける一方で、技術の進展によってその能力と範囲を拡張し続けてもいる。たとえば、放送のデジタル化がなされた現在では、テレビ放送そのものに電子番組表の機能が組み込まれ、テレビだけで番組を知ることも可能になった。テレビは、もはや他のメディアがなくてもテレビだけで必要な情報を共有できるようになったのである。そうであっても、絶対時間を共有するなかで成立するメディアであることは変わらない。リアルタイム視聴はそのような放送メディアの時間をそのまま受け入れる受容方法であり、タイムシフト視聴は、放送メディアが強要する絶対時間を乗り越えて受容しようとする方法であるということができる。そのように考えると、リアルタイム視聴とタイムシフト視聴の違いは個人的な時間の使い方のバリエーションではなく、メディアそのものの性質にかかわるといえる。

## 2.2. テレビ視聴の変遷

テレビ視聴の普及については、テレビの受像機の普及と同時に、テレビ局による送信網が各地をカバーすることが必要である。その観点で日本のテレビ放送の進展を追ってみたい（以下、藤竹他編 2018, NHK 放送文化研究所編 2003: 119-120）。

1953年のNHKによるテレビ本放送が開始したあと、1960年頃からは全国主要都市でNHK総合・教育と民放の視聴が可能になり、なかでも関東・近畿の大都市圏では複数の民放が視聴可能になった。その後UHF帯の開放を受けて1970年頃からテレビ局の再編が行われ、現在までつながる民放のネットワーク系列化がなされた。なお、系列化は制度上の定義ではないが、多くの放送事業者が資本・経営面で東京キー局と密接に関係を保ち番組の多くを融通する関係を指している。視聴できるテレビ放送のチャンネル数は、その土地で開局している民放のテレビ局数によって決まるが、首都圏などの大都市圏のほうが多くなり、地方では少ないという格差があったことから、1986年に民放を全国各地で最低4チャンネル受信可能とする目標が設定された（いわゆる「全国4波化」政策）。また物理的に電波が届きにくい山間部や離島などの視聴困難地域にもテレビ放送を提供するために衛星放送（BS放送）が開発された。NHKのBS放送は1989年に本放送を開始し、その後地上波が届く地域にも新しいチャンネルとして受け入れられていった。

テレビのデジタル放送は1996年のCS放送開始で登場し、2000年にBSデジタル、2003年に地上波デジタル放送が開始されて、視聴する側では当初はチャンネル数の増加と理解されていたが、最終的にテレビは完全デジタル化され、2012年3月にはアナログ放送が完全に停波された。

1990年代、とくに1995年のWindows 95の発売をきっかけに一般家庭にパーソナルコンピュータ（PC）が普及し、一般でのインターネット利用が広がっていった。同じころ携帯電話の普及が進み、1999年にNTTドコモのiモードサービスが開始されると携帯電話はインターネット接続端末として利用されるようになり、日本のインターネット利用者は飛躍的に増加した。2010年頃からスマートフォンが本格的に普及し、またPCでもタブレット型の端末も登場し、通信分野でもインターネットを通じていつでもさまざまな情報にアクセスできる状況が整うことになる。現在では、テレビ番組をインターネット経由で視聴することも可能になっていて、テレビはインターネット上の動画コンテンツのひとつとも言える状況になっている。

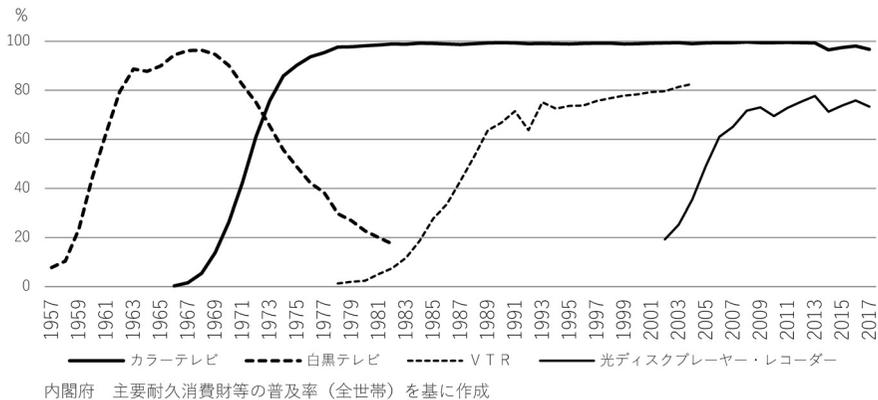


図1. テレビ・録画機器の全国世帯普及率

### 2.3. 1970年代のテレビ視聴

テレビ放送したいの普及ぶりは前述のとおりであるが、ここで1970年代のテレビ視聴の実際について見ていきたい。テレビ受像機を購入している世帯はテレビ放送を受信できる状況にあって、なおかつテレビ視聴をしたいという意思を有していると推定できることから、テレビを視聴するために購入するテレビ受像機の普及具合、すなわちテレビの全国世帯普及率が国内におけるテレビ視聴の受容の広がりを反映していると理解することができる<sup>2)</sup>。そこで、テレビ視聴の変遷をテレビ受像機（以下、テレビ受像機を単にテレビと表現することがある）と録画機器の世帯普及率から読み解きたい。

テレビ黎明期、テレビが普及する前は、街頭テレビが人気を集めた。街頭に設置されたテレビを集まった人々が見る（というよりはテレビに人々が群がる）のである。しかし、テレビが当時の平均的な家庭にとってははげして安い買い物ではなかったにもかかわらず、世帯普及率は1960年から1961年にかけて50%を超え放送開始から10年後の1963年には88.7%とほぼ1家庭に1台普及した（図1、白黒テレビ）。テレビの普及はきわめて速く、テレビは急速に家庭のなかに入りこんだ。

カラー放送を視聴できるカラーテレビ（図1、カラーテレビ）は1960年代後半から普及しはじめる。カラーテレビの世帯普及率は、1973年頃には白黒テレビの普及率と逆転し1975年には90%に達した。カラーテレビの普及途上である1960年代後半から1970年代のカラーテレビ世帯普及率と白黒テレビの世帯普及率を合計すると100%を超えるが、それは、カラーテレビを購入したのちも白黒テレビを2台目のテレビとして残す家庭が多かったためと推測される。カラーテレビの普及はひと家庭にテレビ複数台の時代の到来でもあった（NHK放送文化研究所編2003）。

家庭用ビデオデッキ（図1、VTR）は1970年代の終わりに登場したが、普及が進んだのは1980年代で1990年に世帯普及率が7割に達する。家庭用ビデオデッキはテレビ番組を録画し再生する機器で、記憶媒体はカセット型のビデオテープである。これにより人々は、テレビ番組の放映時間に見られなくても、あるいは見たい番組が同じ時間帯に重なっていても、見たいテレビ番組の一方を録画して後で視聴することができるようになった。そのようにして放送時ではなく時間をずらして視聴するのがタイムシフト視聴であり、ここに「リアルタイム視聴」と「タイムシフト視聴」という2つの視聴形式が意識されるようになるのである。

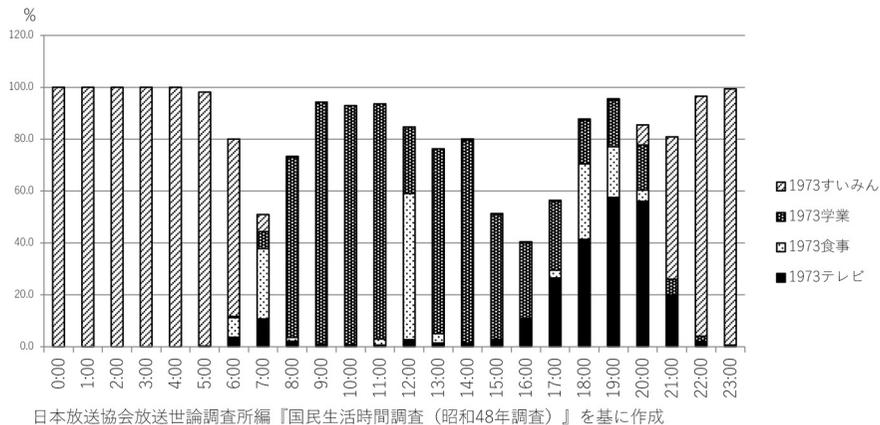


図 2. 1973 年の小学生の生活時間 (抜粋)

1970 年代後半にはチャンネルの切り替えが手元で簡単にできるリモートコントローラー（リモコン）付きのテレビも発売されている。複数台普及に伴う個室へのテレビ設置と相まって、1970 年代後半以降、個人の好みを反映した視聴スタイルが実現できる環境が整いはじめ、1980 年代のビデオデッキの普及が拍車をかけた。そのため、リアルタイム視聴、タイムシフト視聴とは放映時間に見るかどうかの違いであるものの、実態として、テレビ視聴が個人化されているのがタイムシフト視聴、家族と見るのがリアルタイム視聴と関連付けられやすい。日本の 1970 年代におけるテレビ視聴は、リアルタイムかつ個人化されていない視聴であることに留意が必要である。

### 3. 1970 年代の子どもとテレビ

#### 3.1. 1970 年代の子どもの生活とテレビ

本項では、NHK 放送文化研究所が継続して実施している「国民生活時間調査」をもとに 1970 年代当時の子どもの生活とテレビ視聴について見ていく<sup>3)</sup>。同調査は 10 才以上の国民を対象に、1960 年から 5 年ごとに実施されているもので、「小学生」という区分の集計があるのでそれを利用する。なお、調査対象が 10 才以上であるから厳密には小学校高学年のみである。図 2 は、1973 年に行われた同調査の中間調査の小学生・平日の生活時間からすいみん、学業（学校、学外の両方含まれる）、食事、テレビの 4 つの行動を抜き出してグラフ化したものである。同調査は行動を 15 分単位で調査しているが、このグラフは 1 時間ごと（15 分×4 コマ）の行為率を単純平均して作成したものである。たとえば、19 時台のテレビの行為率（ながら視聴を含む）の 57.5%は、19 時 00 分から同 15 分までの 53.4%、同 15 分から 30 分の 57.3%、同 30 分から 45 分の 58.1%、同 45 分から 20 時までの 61.3%を平均したものである。

ここから読み取れる 1973 年当時の子どもの生活はおおむね次のとおりである。朝 6 時台に起床し、7 時台に朝食を取り、身支度をして登校する。7 時台の食事の行為率は 27.1%で、大半の子どもが朝食をとっていたとすると 20 分弱の短時間で食事を済ませていることになる。その 7 時台にはテレビ視聴にも小さなピークが認められ、朝食を取りながら、あるいは支度の合間にテレビに目をやっている様子が想像できる。登校後は学校で過ごし 15 時台から 16 時台に下校する。16 時台から上昇するのがテレビ視聴で、17 時台に学業とテレビ視聴の行動の割合が逆転する。食事は 18 時台から 19 時台にとって

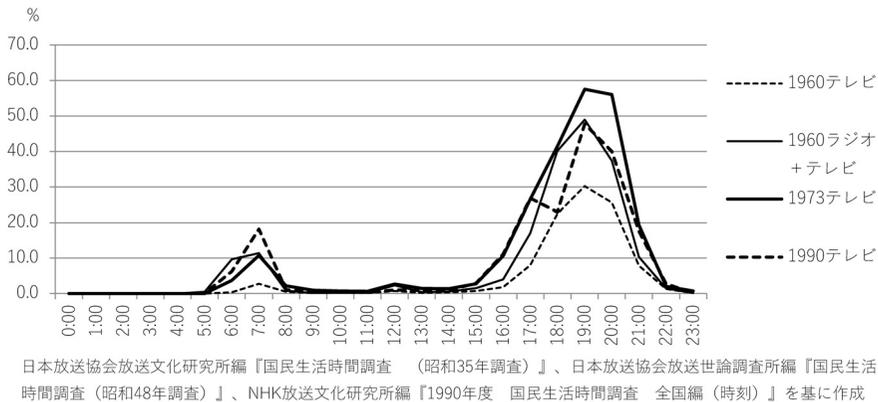


図3. 小学生のテレビ行為率比較（1960年，1973年，1990年）

が、その間もテレビ視聴は増え続け、19時台にピークを迎える。19時台と20時台はテレビの行為率が50%を超えるが、21時台になるとすいみんの行為率が50%を超え、21時を過ぎると子どもたちがテレビ視聴を終えて就寝していることが見て取れる。

100%の子どもがその時間帯ずっとその行為をしていれば行為率100%であるから、行為率50%とは、50%の子どもがその時間帯ずっと、75%の子どもなら3分の2の時間、100%の子どもなら半分の時間、その行為をしていたことに相当する。参考にその当時の番組表<sup>4)</sup>を見てみると、19時台は30分番組が2つ（フジテレビは30分番組と15分番組2つ）、20時台は1時間番組（民放は最後の5分がニュース等のミニ番組）である。調査が15分単位だから断続的にテレビ視聴していた可能性があるものの、リモコン登場前でもあり多くの場合番組単位で視聴していたと推測すると、19時台20時台の2時間においてテレビの行為率が50%を超えるのであれば、大半の子どもが19時30分より前にテレビを見始め、21時近くまで見続けていたと考えて大きく外れてはいないだろう。

子どもたちは、どこでテレビを見ていたのだろうか。当時のテレビ視聴が食事や家族団らんと結びついていたことは、家族とテレビをテーマにした、1979年・1980年に実施された別の調査で明らかになっている（NHK放送世論研究所編1981: 14-18）。それによると、当時、メインのテレビのほとんどが茶の間、食堂や居間といった家族全員が1日の相当長い間過ごす部屋に置かれていた。同調査では、テレビを見るという行為が食事と深く結びついていて、夕食が家族を一堂に集めるきっかけとなり、テレビは一度集った家族をなかなか分散させない役目を果たしていると考えられると分析されている。改めて1970年代の番組表を見ると、平日の16時台はアニメや特撮番組の再放送、17時台は子ども参加型番組、18時台と19時台はアニメや特撮番組の本放送やクイズ番組と子ども向け番組が並んでいる。そして20時台は子どもも含めた家族で見られるようなドラマや音楽番組が放送されていた。夕食中から食後の19時台20時台は、子どもたちはそうした大人も楽しめる番組を家族と視聴していたのだろう。

### 3.2. 他の年代の子どものテレビ視聴時間との比較

1970年代の子どものテレビ視聴について他の年代との違いはあるのだろうか。図3は1973年調査と1960年調査、1990年調査の小学生・平日のテレビ視聴のデータを比較したグラフである。1960年、1973

年、1990年の各調査のテレビの行為率の他、1960年に関してはテレビの世帯普及率が44.7%と全世帯の半分弱であることから、放送メディアとしてまだ有力だったラジオとテレビの行為率の合算を比較に用いた。

共通しているのは、どのグラフもテレビ視聴のピークが2回、朝7時台と夜18時台から20時台にかけての時間帯にあることである。このうち、朝のピークは年代が後になるにつれて高くなる傾向にあり、朝は時計代わりと天気の確認のためにテレビをつけることが一般化していったと考えられそうである。

夜のピークについては興味深い点が2点ある。まず目を引くのは1973年のピークの高さである。19時台、20時台のテレビの行為率については1973年が明らかに高く、いずれも50%を超えていて、1973年の子どもが他の年代と比べてもテレビへの関心が強かったことがわかる。その一方で1960年、1973年、1990年のいずれでも、帰宅後の夕方から20時台までのグラフの推移がよく似ているという点も注目される。夕食前くらいから子どもたちがテレビを見始め、夕食後まで見続けるという生活パターンは共通していて、とくに1960年に注目してみると、テレビ視聴の行為率は1973年と比べて半分程度だが、テレビ普及率も半分程度であることを考え合わせると、テレビのある家庭では1973年と同程度に子どもがテレビを見ていたことになる。また、1960年のラジオとテレビの行為率を合算したグラフは、1990年のテレビの行為率のグラフと形がかなり似ていて、1960年は16時台がやや低く1990年は18時台が低くなっているものの、夜のピークの高さはほぼ同じである。あくまでも統計上の数字をもとにした考察で、かつまた1960年以前の調査がないため推測になるが、1950年代にラジオが各家庭に普及するとともに、子どもたちは学校からの帰宅後夕食前後までの時間帯にラジオを聴きながら過ごすことが生活習慣化したのではないだろうか。

以上から次のように考えられる。テレビの普及に伴い、ラジオの視聴行動のパターンがテレビへと継承され、テレビ普及過程のかなり早い段階から、夕方から夕食後にかけての時間帯に子どもがテレビを見るという生活行動が形成された。そのように子どもがよく見る時間帯だから子ども向け番組が編成され、そして番組があるから子どもはその時間にテレビを見るという形で子どものテレビを見る習慣が強化された結果が、1970年代の子どもの生活時間といえる。その後テレビの求心力は弱まるものの、その生活パターンじたいは少なくとも1990年までは続いていて、それはつまり1960年からの30年間、子どもたちの日常生活における放送メディアとの接触のパターンは大きく変化していないことを示している。

### 3.3. 1970年代の子どものテレビの記憶

1970年代の子どもがより多くテレビを見ていたことはわかった。そこで本項では、1970年代の子どもにとって当時のテレビがどういうものだったかを見ていきたい。手がかりとするのは、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所を母体とした2008年から2012年にかけて実施された共同研究プロジェクトである（萩原滋編2013）。同プロジェクトは世代内、世代間での記憶の共有という視点を基本におき、テレビを通じた集合的記憶の構築をテーマに複数の社会調査を実施して、各世代とテレビのかかわりを論じているが、ここで参考にしたいのは、1970年代の子どもの当時の記憶に関する調査と、スター・アイドル・音楽番組の集合的記憶を取り上げた調査の2点である。

1970年代の子どもの当時の記憶に関する調査（萩原滋編2013: 100-136）では1960年代生まれの男

子、女子、それぞれのグループインタビュー調査が実施されている。1960年代生まれの男子へのインタビュー調査では、少年時代のテレビの記憶について『仮面ライダー』『ウルトラマン』といった特撮番組などの思い出が生き活きと語られたという。当時テレビを見ることを禁止されていた子どもは、友だちとの会話や雑誌の情報などからテレビ番組の情報を得て、テレビ番組に関する会話に加わっていたといい、番組を見なくても別のメディアによって番組に関する情報を補完することができたことがわかる。そうした特撮番組はほぼ1年ごとに作品を切り替えてシリーズとして継続されていたため、視聴者である子どもは、何年生のときにどの作品を見ていたという形で、自分の年齢と特定の作品の記憶をリンクさせることができた。1960年代生まれの女子<sup>5)</sup>のインタビュー調査では、幼児期と児童期のテレビ番組の想起量が多かったことが指摘されるとともに、同年齢の子どもたちが出演する番組を見ながら出演者と同じ行動をとる、あるいはアニメ番組の同世代の主人公に感情移入するといった疑似体験が着目されていた。たとえば土曜夜8時の娯楽番組『8時だヨ！全員集合』（以下、『全員集合』<sup>6)</sup>）について、コント中の出演者に呼びかけたり（危険が近づくのを教える）、出演者の呼びかけ（「歯磨いたか？」）に応じたりしたといったエピソードが語られている。

この『全員集合』というバラエティ番組は全国各地で公開収録され、その多くは生放送であった。『全員集合』が放映されていた土曜20時台は、1973年の生活時間調査では小学生のテレビ視聴の行為率が70%を超えていて、「みんなが見ている」といって過言でないほどの人気ぶりであった。公開のステージで繰り広げられるコントや歌などの演目を観客席側から撮影、放送されていたため、引きの画面では、ステージの手前に観客席がシルエットとして映り込む。つまり、各家庭のテレビの前の子どもたちも観客席と同じステージを見ていたといえる状態にあって、それが可視化されていた。それだけに、この番組では中継場所の観客席だけでなくテレビの前の視聴者を巻き込んだ「空間」が成立しえたのである。だからこそ「土曜八時という放送開始時刻は、明日は日曜日で学校もなく解放感に浸る子どもたちにとって、心置きなくその王国に参入できる最高の設定」であり「『全員集合』とは、テレビと生活の一体化が作り出した、子どもが実際、ほとんど神話的に「子ども」でありえたような稀有な空間だったといえるのかもしれない」（太田2007: 238-239）という評価が成り立つのである。

もう1つの社会調査は、スターやアイドル・音楽番組の集会的記憶を10代から60代の年齢層別に分析した2011年のウェブ調査である（小城他2012）。それによれば、どの年代でも自分が青年のころ放送されていた音楽番組に関する集会的記憶にバンプ<sup>7)</sup>が生起していたが、そのバンプの大きさに顕著な年代差が見られたという。「テレビ全盛期の1970～1980年代に青年期を迎えていた現在の40代・50代において、その当時に放送されていた『夜のヒットスタジオ』、『ザ・ベストテン』、『ザ・トップテン』といった音楽番組に対する関与が突出して強く、また、それらの音楽番組を通じて人気を博していた、「スター・アイドルへの関与がきわめて強かった」（小城他2012）。一方で10代・20代ではそこまで強く関与する番組が確認できず世代全体で共有する集会的記憶が希薄だったという。調査時の40代・50代とは1952年から1971年生まれにあたり、1970年代の小学生、すなわち1970年代の子どもに相当する。この調査によると、1970年代の子どもは、他の年代の子どもと比べても、青少年期に見たテレビの記憶が強く残存している。

以上のようなテレビの記憶の調査結果から1970年代の子どもはテレビの記憶を他の年代と比べても強く持ち、かつ同じ年代の者と広く共有しているといえる。その点についてひとつ興味深いのは、先に挙げた社会調査のインタビュー対象と同世代の1965年生まれを対象にした商業誌『昭和40年男』が存

在していることである。毎号 1965 年生まれが青少年だったころの漫画やアニメ、社会現象などを特集し、同い年の著名人のインタビューを掲載するなど、かなり狭い生年層をターゲットにしながら、2016 年の取材記事<sup>8)</sup>によれば、2009 年創刊以来部数を伸ばし、記事の時点で 20 万部超だという。同記事では、この雑誌のキーワードは「体験」で「この雑誌からは『体験』をベースにした熱量を感じずにはいられない」と紹介され、当時の編集長も「当時見ていたからこそその共感をすごく大事にし」ていると話している。この編集長が「(1965 年生まれ)以降の世代はどんどん多様化していく流れなんです。(中略)『ああ、これ知ってる!』というのがどんどん分散しちゃっているんですよ」とも述べていることは、1970 年代の子どもが他の世代より共通の記憶を多く共有していることを示唆している。そして、対象をピンポイントにこの生年層に絞った雑誌が商業的に成立しうるということからも、この世代のテレビの記憶が強かったことを推し量ることができる。

#### 4. リアルタイム視聴の性質

##### 4.1. 1970 年代のテレビ視聴の特徴

1970 年代の子どもはよくテレビを見ていたことはたしかだが、子どもが夕方から夜にかけて長時間放送メディアに触れる生活パターンは 1960 年代から始まっていたと考えられ、また前後の世代と比べて視聴時間が 2 倍 3 倍だったわけでもない。それにもかかわらず、1970 年代の子どものテレビの記憶が他の生年層のそれと比べてもより強く共有されているのはなぜだろうか。その理由こそ「1970 年代のテレビ」の特徴にあたると思われる。1970 年代の子どもが、他の生年層と比べても強いテレビの記憶を同年代の間で広く共有している要因を考えると、「体験」という言葉が手がかりになりそうである。すなわち 1970 年代の子どもがテレビに関連した記憶を 40 代、50 代になっても強く保っているのは、当時のテレビ視聴が単なる視聴ではなく「体験」に通じているからではないだろうか。

メディアの形式に注目したマクルーハンは、メディアへの参加度合いの高低からメディアを「クール・メディア」「ホット・メディア」に二分した。彼の定義によると、ホット・メディアは単一の感覚を高解像度で拡張するメディアで、高解像度とは送り手から提供される情報量が十分に満たされた状態を指し、受け手の参加度は低くなる。それに対し、低解像度とされるのがクール・メディアで、クール・メディアでは受け手の参加度が高くなる。これは、絶対的な定義というより対比から理解されていて、たとえば同じ音声メディアでも、電話とラジオの対比では、発せられる言葉の情報は少ない電話がクール・メディアで情報量が多いラジオがホット・メディアである (McLuhan 1964=1987: 23)。

マクルーハンによれば、テレビはクール・メディアである。このテレビは、1950 年代、60 年代の北米のテレビが念頭におかれている。マクルーハンはテレビがクール・メディア=低解像度である所以を走査線で動的に表現されることに求めていたが、当時テレビは映画と比べて画質が悪く、画面上の情報量が少ないことは直感的に理解しえた。一方、現在のテレビの画質は映画などと比べ遜色がなくなり、情報量の多寡を映画と区別するのは難しい。ところが、受け手による情報補完という観点でテレビというメディアを見直してみると、テレビは映像と音声の両方で表現されるために視聴者が音声と映像を統合して理解することが必要であることに気づく。また、本来テレビはリアルタイム視聴するものであって、放送時間に見逃すと二度と見るできないという一回性も有していて、内容を十分に把握するには没頭することも求められる。そのように考えると、リアルタイム視聴のテレビは、視聴者の補完そして参加が必須のクール・メディアということができる。

そのうえフィクションや娯楽番組の場合、番組ごとに設定・前提があり、シリーズや連続物であればそれらが毎回説明されることもなく展開していくから、番組をきちんと理解するには事前事後に番組の外から情報を集めることが必要になる。たとえば特撮番組は定番のフォーマットがある。通常毎週1話30分完結というストーリー構成で、多くの場合、怪人・怪獣といった脅威が突然外部から現れて日常生活が脅かされるが、人間の力を超えた能力を発揮するスーパーヒーローによって救われる。実際に救われることになるのは視聴者と同じ少年少女である。当時の子ども向けアニメ番組も同じようなフォーマットで、そのスーパーヒーローが未来からタイムマシンでやってきたロボットだったり（『ドラえもん』<sup>9)</sup>）、魔法の力を使う少女だったり（魔女っ子シリーズ<sup>10)</sup>）する。

これらの特撮、アニメ番組では、テレビのなかに展開する世界は一見現実世界とほぼ変わらないため、見ている子どもは当然に理解することができるのだが、同時に、その世界では自分たちの世界ではありえない非日常の脅威が発生することを理解し引き受けてもいる。学校での友だちとの会話や雑誌等で交わされる情報交換は、自分が引き受けたその世界を他の子どもが引き受けていることの確認行為であり、その世界をより理解するための作業でもあった。情報交換を通じて得た知見と確信で、子どもたちはより深く番組世界を理解し、さらに番組に夢中になる。『全員集合』が同じ時間に同じ場所にいることを体現しているとすれば、『仮面ライダー』『ウルトラマン』といった特撮番組は視聴する子どもたちがいる世界が同じであることを示している。

1970年代の子どもたちはテレビを楽しむにあたって、子ども向け番組のフォーマットを通して、じつに多くの日常的な要素と超日常的な要素を周辺の子どものと共有していた。番組のベースとなる「日常」の世界は当然受け手である子どもの日常であり、それぞれの日常が同じような日常であることが推定されている。当時の日本の子どもであれば、おおむね日常と認められる生活・文化があり、それをベースとして作られるテレビを見る、あるいはその情報や感想を友だちと交換することにより、典型的な日常のイメージはさらに強化されていくことになった。そして、番組それぞれに設定された超日常的な要素が、番組のなかの世界だけに通じる決まりとして「日常」とは別の世界を作り出す。子どもにとってテレビを見るということは、テレビのなかの世界を引き取り、その場に自分の身を置くことに他ならなかった。視聴者である子どもがテレビのなかの世界を引き取るという形で補完していることじたいが、テレビが「クール・メディア」であることを示している。

#### 4.2. リアルタイム視聴の特徴

全国普及やカラー化という点では、テレビ視聴は1980年代以降も大きな違いはなかったにもかかわらず、1970年代のテレビ視聴の「体験」はその後の年代では形成されなかった。1970年代とそれ以降の違いのひとつはビデオデッキの普及である。日本では1980年代を通じて一般家庭にビデオデッキが普及し1990年代には世帯普及率が7割程度に達した。その結果、テレビ視聴のスタイルがリアルタイム視聴からタイムシフト視聴へと移り変わるようになったが、このことが、テレビ視聴の質が変化し、テレビ視聴から「体験」が失われたことと関係があるのではないだろうか。

テレビは放送メディアであり、成り立ちから時間に統制されることになるメディアである。番組が時間枠で編成されるから、絶対的に正確な時間に管理される。そのため絶対時間が共有されている社会でないとならない。その一方で、テレビ番組の視聴中は、何時何分という実際の時刻はあまり気にされない。番組に没頭している間は番組世界の時間の流れに引き込まれ、番組と番組の間や番組途中の

CMの時間が番組世界とは切り離して「トイレタイム」などに使われる。テレビ視聴中、時の流れはテレビの進行に合わせて認識され時間は相対的である。このように、テレビは本来、絶対時間と相対時間の両方が共有されることで成り立っている。ところが、タイムシフト視聴になると、視聴者自身が視聴する時刻を決めることができ、さらにビデオデッキの機能によりCM部分を飛ばしたり再生速度を変えたりすることで、視聴の進行が番組の経過として流れていく時間に支配されることがなくなるため、視聴中の時間が共有されないのである。リアルタイム視聴とタイムシフト視聴とは、同じテレビ視聴であっても時間性が大きく異なる。

真木は、共同体の中にあるとき共同体で共有されるのは共同時間性であり、時間の変化は季節や種まき、収穫といった具体的な流れによってもたらされるが、異なった時間性をもつ集団との間で交渉が生じたり、あるいは共同体内部の分業が進み固定化することによって時間性が分裂したりした場合には、相互に調整するために共通時間が必要となるという(真木 2003)。リアルタイム視聴では、同じ番組の視聴者は視聴中、番組の流れに沿って「同じ時間」を過ごすことになる。それがリアルタイム視聴における共同時間性である。視聴者はいわば共同時間性の成立する「共同体」にいるのであり、そこでの見聞は「体験」として認識されることになる。一方、タイムシフト視聴では、視聴の進行を視聴者が個々にコントロールすることができるがゆえに、共同時間性が崩れて成立せず、「共同体」は出現しないのである。

1970年代当時の子どもは「みんなテレビを見ていた」といえる状況にあり、そうした「みんな見ている」状態を可視化したのが『全員集合』という番組である。公開収録で生放送という形式により、テレビに会場にいる子どもたちとその反応が映り込み、テレビを介して見ている子どもはそれをリアルタイムで知る。そのとき、自宅のテレビの前という場所が、会場の観客席の拡張であることが顕わになり、視聴者である子どもたちに、テレビを見ることは同じ時間にテレビの前という同じ場所にいて同じ行動をとっていることなのだとしらした。同じ番組を視聴するということは、ひとつの空間を成立させ、その空間での出来事は「体験」として子どもたちに「記憶」され、個々の記憶は世代共通の記憶として成立しえたのである。そのように考えると、リアルタイム視聴のテレビはマクルーハンのいうとおり参加度の高いメディアだと評価することができる。

#### 4.3. リアルタイム視聴とパブリックビューイング

2000年代に入り、日本ではパブリックビューイングがメディア受容の形として台頭した。パブリックビューイングとは、家庭と離れた場所で見知らぬ人々とともにテレビ視聴を行うもの(西尾 2009)で、大別するとスポーツバーなどテレビ受像機が常設される場での視聴とスタジアムなどで実施される視聴イベントがある(立石 2014)。日本では、2002年の日韓サッカーワールドカップでパブリックビューイングというイベントが導入され、その後はサッカーだけにとどまらず、他のスポーツやスポーツ以外のイベントにおいても開催されるようになった。パブリックビューイングというリアルタイムのメディア受容の形態が、テレビのタイムシフト視聴が一般化したタイミングで登場し、定着したことは興味深い。なぜなら、リアルタイム視聴からタイムシフト視聴への変化によって失われたものを、パブリックビューイングで補完していると見ることが可能だからである。

西尾は、映像メディアの受容を「イベントの再イベント化」ととらえ、イベントがコンテンツ、オーディエンスの視聴形態、場所の3つの観点で再構成されるとし、パブリックビューイングはテレビに

よって家庭のなかに持ち込まれた再イベント化が外に出て実現したものと理解した。そして、それまでの映像メディアの受容において地域交流（映画や街頭テレビ）、家庭（リアルタイム視聴）、個人（タイムシフト視聴）と場所の脱個人化が進んできたが、パブリックビューイングは、場所の脱個人性、コンテンツの予測不可能性、オーディエンスの匿名性という3つの側面の融合点であるとする。そのうえで、パブリックビューイングの体験は、オーディエンスの匿名性のために信頼などの深い関係を醸成させないまでも「同質化」をもたらし、結果として、人々に盛り上がりや一体感が共有されていると指摘している（西尾2009）。

パブリックビューイングがオーディエンスの匿名性にかかわらず、同質化をもたらし一体感を共有させるもので、それが2000年代になって一気に一般化するほど求められているのであれば、それ以前は、その要求は別の形で充足されていたためにパブリックビューイングが必要なかったと考えることができよう。そして、リアルタイム視聴が同じ番組の視聴者にある種の「体験」を共有するものならば、パブリックビューイング以前に一体感を充足させていたのがテレビのリアルタイム視聴であるという推定は十分成り立ちうる。

## 5. 結論

日本の子どもはラジオの時代から放送メディアに魅力を感じていたようで、1953年にテレビ本放送が開始されると、その関心はテレビに向けられた。1970年代に入るところには、テレビ放送のカラー化、放送網の全国ネットワーク化が進み、現在まで続く日本のテレビ放送の基本構造が確立していた。フルカラーの映像と音声を再生するテレビの視聴は、映し出されるそのままを受け止めればいように感じられるが、実際には、視聴の前提として時間性と「日常」の共有が求められる。実際、1970年代の子どもたちは、当時の子どもたちの日常生活を前提とする設定とそこから生じる文脈を、まずは番組から、そして友だちとの会話や雑誌など他のメディアから得て共有していた。

そもそも放送メディアは時間枠で編成されて提供され、放送されるコンテンツを放送されているその時間にリアルタイムで視聴するものであった。テレビのリアルタイム視聴では、視聴者は同じコンテンツを各々の家庭という異なる場所で、同じ時刻そして同じ速度の時間経過で受容する。放送が開始する時点は絶対時間で決まるが、いざ放送が始まるとその経過に合わせた時間で視聴者は行動することになり視聴中には絶対時間が意識されない。テレビのリアルタイム視聴では、制作における共通時間性と視聴における共同時間性という2つの時間性が存在する。そして後者の視聴中の時間性が、リアルタイム視聴における視聴者を離れた場所においても「同じ時間」を共有しているといえる状態にする。

1970年代の子どもの場合、テレビを見るのは、現実の場所こそ違え、多くは「自宅の家族が集まる場所」であった。それぞれ別の家であっても同じといえる場所でテレビを見ていて、そのことはテレビの話題の中で確認することができた。時間だけでなく場所も共通していることにより、テレビ視聴は時間と空間を共有するある種の「共同体」と呼べるものを視聴者に提供していたのである。そのような「共同体」で共有された視聴は、単なる行動ではなく「体験」といえるような影響力を有することになった。それが1970年代の子どものテレビの記憶の強さに反映されている。

1980年代以降、録音録画技術が一般家庭にもたらされ、録画して好きな時間に視聴するタイムシフト視聴ができるようになり、テレビのリアルタイム視聴という前提が崩れていく。視聴者全員がリアルタイムで視聴しているという前提が崩れたために、実際に時間をずらして視聴していたかどうかにかかわ

らず、同じ時間を共有しているという認識が成り立たなくなり、結果として共同時間性は損なわれ、テレビ視聴における「空間」が失われることになった。

タイムシフト視聴が普及しテレビ視聴から「空間」が失われた後に登場したのがパブリックビューイングである。日本では2002年のサッカーワールドカップ以降一般に普及したが、リアルタイム性が崩れて同じ空間という推定が働かなくなっただけから、人々がリアルに同じ空間で視聴するようになったことは、リアルタイム視聴にはあったものがタイムシフト視聴で失われ、人々がそれを求めたからと考えられる。そうであれば、失われたのはパブリックビューイングで得られるとされる「一体感」であり、オーディエンスによる体験の共有であるといえよう。逆にいえば、テレビ視聴は本来的には、視聴者側にひとつの空間を作り上げ「一体感」をもたらすものだったと考えられるのである。

本論文では1970年代の子どものテレビ視聴の考察を通して、テレビのリアルタイム視聴が視聴者側に共同体的な空間をもたらすことを指摘した。そのような性質があることから、テレビ視聴は本来、垂れ流しのコンテンツをただ受け止めるような受動的なものではなく、より能動的で、ある意味で参加度の高いものであったと理解することができる。ただし、1970年代のリアルタイム視聴は実態として「家族で見る」という前提が内包されていた点は注意が必要である。リアルタイム視聴でさえあれば共同体的な空間をもたらすのか、あるいは家族や友人といった社会とのかかわりが共同体的な受容を促進するのかを見極めることが次の課題となるだろう。

#### 注

- 1) 「番組フォーマット」とは、法的にはまだ定義されていないが、一般的に番組の企画・コンセプトだけでなく、具体的な進行方法、出演者のセリフ、番組セット等のデザイン、音楽・効果音、その他の制作ノウハウをひとまとめにしたものを指し、取引対象になっている。(諏訪野 2016)。
- 2) この項は青木 2011, NHK 放送文化研究所編 2003などを参考にした。
- 3) 1960年調査は『国民生活時間調査(昭和35年調査)』(日本放送協会放送文化研究所編, 1990, 大空社), 1973年調査は『国民生活時間調査(昭和48年調査)』(日本放送協会放送世論調査所編, 1997, 大空社), 1990年調査は『1990年度 国民生活時間調査 全国編(時刻)』(NHK 放送文化研究所編, 1991, 日本放送出版協会)を参照している。
- 4) 番組表はテレビ欄研究会編著『愛蔵版 昭和のテレビ欄 1954-1988』TO ブックスを参照した。同著は昭和期の首都圏のテレビ欄を原則毎年4月, 10月それぞれ1週間ずつ収録している。
- 5) 対象者の13名中1名は1972年生まれ。
- 6) 1969年10月4日から1971年3月27日, および1971年10月2日から1985年9月28日まで毎週土曜, 20時からTBS系列で放送されていたTBS製作の公開バラエティ番組。全803回。番組全体の平均視聴率は27.3%で, 最高視聴率は1973年4月7日放送の50.5%(ビデオリサーチ調べ, 関東地区)。Wikipedia (2021年3月9日確認) 参照: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%99%82%E3%81%A0%E3%83%A7%E5%85%A8%E5%93%A1%E9%9B%86%E5%90%88>
- 7) バンプとはレミニセンス・バンプのことで, 自伝的記憶の分布の特徴のひとつで, 10~30歳の出来事の想起量が多いという現象を指す。(榎 2008)
- 8) マイナビニュース「雑誌不況の時代に超ニッチ狙いで異例のヒット、『昭和40年男』編集長を直撃一企画を支える“俺たち感”とアニメ『コンクリート・レボルティオ〜超人幻想〜』への共感」(2019年7月15日確認) 参照: <https://news.mynavi.jp/kikaku/20160115-a004/>
- 9) 『ドラえもん』は22世紀の未来からやってきたネコ型ロボット「ドラえもん」と, 何をやっても失敗する小学生「野比のび太」が繰り広げる少し不思議(SF)な日常生活を描いた作品。1973年に半年間, その後1979年から現在までアニメ番組として放送。Wikipedia (2021年3月9日確認) 参照: <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

%E3%83%89%E3%83%A9%E3%81%88%E3%82%82%E3%82%93

- 10) 魔女っ子シリーズとは、不思議な能力を持つ女の子が活躍して騒動や事件を解決するアニメ番組。1966年放映開始の『魔法使いサリー』から次々と登場し、1970年代では『魔女っ子メグちゃん』（1974年～1975年）など。東映アニメーション（2021年3月9日確認）参照：<http://www.toei-anim.co.jp/>

#### 引用文献

- 青木則夫, 2011, 『図解・テレビの仕組み——白黒テレビから市場デジタル放送まで』講談社ブルーバックス
- 藤竹暁・竹下俊郎編, 2018, 『図説 日本のメディア [新版] ——伝統メディアはネットでどう変わるか』NHK 出版
- 萩原滋編, 2013, 『テレビという記憶——テレビ視聴の社会史』新曜社
- 濱野智史, 2008, 『アーキテクチャの生態系』NTT 出版
- 門林岳史, 2009, 『ホワッチャドゥーイン, マーシャル・マクルーハン? ——感性論的メディア論』NTT 出版
- 北村日出夫・中野収編, 1983, 『日本のテレビ文化』有斐閣
- 小城英子・萩原滋・渋谷明子・志岐裕子・李光鎬・上瀬由美子, 2012, 「テレビが構築する社会的出来事・音楽番組・アイドルの集合的記憶——ウェブ・モニター調査(2011年2月)の報告(3)」『メディア・コミュニケーション』(慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要) 62: 79-105
- 槇洋一, 2008, 「ライフスパンを通じた自伝的記憶の分布」佐藤浩一・越智啓太・下島裕美編『自伝的記憶の心理学』北大路書房, 76-89
- 真木悠介, 2003, 『時間の比較社会学』岩波書店〈岩波現代文庫〉
- McLuhan, M., 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York, McGraw-Hill Book Company (= 1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論——人間の拡張の諸相』みすず書房)
- NHK 放送文化研究所編, 1991, 『1990年度 国民生活時間調査 全国編(時刻)』日本放送出版協会
- NHK 放送文化研究所編, 2003, 『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会
- NHK 放送世論調査所編, 1981, 『家族とテレビ——茶の間のチャンネル権』日本放送出版協会
- 日本放送協会放送文化研究所編, 1990, 『国民生活時間調査(昭和35年調査)』大空社
- 日本放送協会放送世論調査所編, 1997, 『国民生活時間調査(昭和48年調査)』大空社
- 西尾祥子, 2009, 「パブリックビューイングを構成するものは何か——コンテンツ, 場所性, オーディエンス」『情報文化学会誌』16(1): 86-92
- 太田省一, 2007, 「資料 七〇年代を代表するテレビ番組の基礎知識」長谷正人・太田省一編著『テレビだヨ! 全員集合——自作自演の1970年代』青弓社, 233-257
- 佐藤卓己, 1998, 『現代メディア史』岩波書店
- 諏訪野大, 2016, 「テレビ番組フォーマットの法的位置づけに関する考察」『法學研究: 法律・政治・社会』慶應義塾大学法学研究会, Vol.89, No.1, 193-213
- 鈴木謙介, 2009, 「設計される意欲——自発性を引き出すアーキテクチャ」東浩紀・北田暁大『思想地図 vol.3 特集・アーキテクチャ』日本放送出版協会, 110-135
- 立石祥子, 2014, 「日本型パブリック・ビューイング文化の成立——2002年サッカーW杯におけるオーディエンス経験から」『情報文化学会誌』21(2): 27-34
- テレビ欄研究会編著, 2012, 『愛蔵版 昭和のテレビ欄1954-1988』TO ブックス